

## 中国留学一年間を振り返って

大東文化大学大学院の留学制度を利用し（大東文化大学大学院学生外国留学制度に係る奨学金給付生）、一年二ヶ月の中国留学を終え、先日帰国しました。留学中の日録および毎月の国際交流センター提出中間報告書をもとに、特に印象に残ったことを中心に中国留学記を作り、ここに報告します。

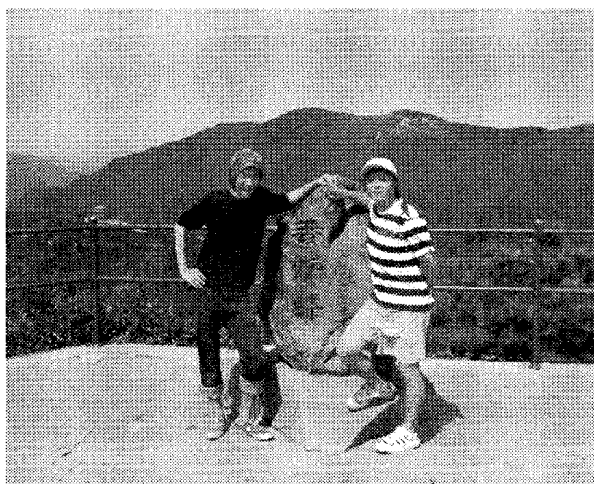
### 留学期間

二〇〇六年六月二十七日～八月二十八日 北京 地球村語学学校  
二〇〇六年八月二十九日～二〇〇七年八月七日 杭州 中国美术学院

### 一、北京での生活

留学が決まってからというもの、中国語の学力に不安を感じていた。留学先の中国美术学院での授業は最初から中国語での授業だということが出国を早めた。杭州での授業開始から逆算して二ヶ月前に北京に入った。北京には同じ書道学科卒業生の佐川君が留学中であつたので、彼を頼って北京地球村語学学校に通い始める。ここは授業料が安いのと、入学手続きがその場でできるという利点があつた。アパートを借りて初めての海外一人暮らし。

松尾大輔



北京香山頂上韓国人の同学と（2006年7月）

朝七時に起床。七時半に出発。自転車に乗って近所の屋台で餅（お焼き）と豆浆（豆乳）を買ってから十五分で語学学校に着く。教室で朝飯を食べながら、教科書を開き少し予習する。私の班の生徒は七、八名で、韓国人、インドネシア人、ドイツ人だった。韓国人が多いのがこの特徴だ。日本人は私一人。先生は私と同年の若い張老師。話すことを中心に教える「説漢語」の授業だ。

授業は午前中だけで終わる。午後は自由に使えた。一週間も我慢できずに、私は早速街を徘徊しはじめた。頤和園、琉璃廠、潘家園、故宮博物院、首都博物館、天壇公園、茶館……。二ヶ月の内に、バスも列車もタクシーも乗りこなせるようになった。暑い夏の北京を歩き回った。

語学学校には日本語を学ぶ中国人も通っていることを知って、そのクラスを訪ね、「相互学習」の相手を探し、三人の中国人学生と中国語と日本語で一時間交代と決めて教え合うことにした。

毎日、新しい言葉を習い、それをすぐ使ってみる。それが通じた時は飛び上りたくなるほど嬉しい。そうやっていくうちに、私は自然と異国での生活に慣れていった。中国人と話したくて、毎日のように同じ店で、西瓜冰淇淋（スイカアイス）を一元（十五円）で買い、店の「オヤジ」にニヤニヤされるのさえ楽しかった。しまいには店に入るとアイスのケースから探して出してくれたりした。「これが一番新鮮だ」などと怪しいことを言われ、「本当か？」と真面目に尋ねる自分が可笑しかった。

中国人に教えてもらった「老舍茶館」に一人で行き、京劇を見た。かの芥川龍之介はかつて北京で京劇を見てその演奏の耳をつんざくばかりの音に辟易したエピソードを、なにかの文章で読んだ記憶がある。特にこの京劇に興奮した。最前列に座ると、舞台袖の演奏者が間近で見られる。独特のリズムに衣装を眺め、花の浮いた茶を飲んだそれこそが中国



中国美术学院留学生寮二人部屋

の伝統文化に生で触れた瞬間だった。

北京での二ヶ月は瞬く間に過ぎた。杭州行きの寝台列車の切符を買い、中国人の先生に挨拶をし、北京を後にした。北京で買った書籍が持ち切れず、先に郵便局から杭州の中国美術学院宛に段ボール一箱を郵送した。

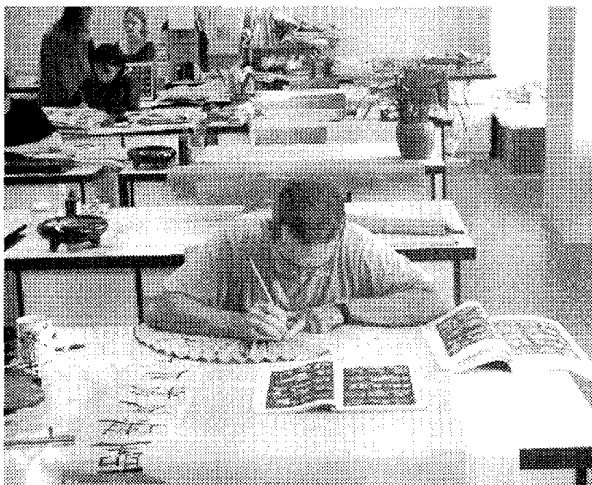
## 二、中国美術学院での学習

杭州に着き、留学先の中国美術学院で留学手続きをし、入寮した。原則二人部屋。相手はスペイン人のフランシスコだ。私が入寮して二日後に大きなスーツケースを引いて彼はやってきた。大柄で年齢は四十代。流暢な中国語を話したので最初戸惑ったが、以前北京に半年、台湾に一年留学経験があるという。道理で中国語がうまいはずだ。私は英語での会話を覚悟していただけに内心ほっとした。今や英語は中国語よりはるかに自信がない。

彼は同じ書法専攻と聞き、すぐに打ち解けた。スイスで仕事しているが、長期休暇を利用して二ヶ月だけ中国美術学院で書の勉強をするのだ。奥さんと二人の子供がスイスにいるのだという。授業開始まで一週間以上あった。親交を深めるために二人で黄山に一泊で旅行した。

授業が始まった。私が在籍した留学生の書法班には、日本人、韓国人、台湾人、シンガポール人、スペイン人、スイス人、ドイツ人がいて、全部で十三、四名いた。韓国人、日本人が多い。もちろん中国語で行われる授業なので、わからない部分は台湾人、シンガポール人に聞いた。

一週間単位で、同じ科目の授業を行うところが日本の授業と大きく異なる。例えば、楷書二週間なら、楷書の授業だけ二週間続く。先生もその間基本的に同じだ。実技中心だが、書道史、『説文解字』を教科書と



書法進修生の教室一人ずつ専用机がある



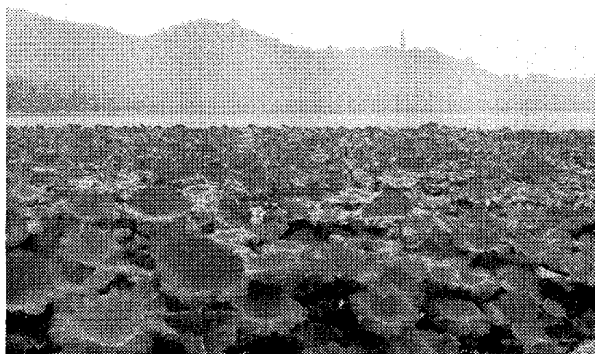
黄山に登る（2006年9月）

する「古文字」等の講義形式の授業もある。「古文字」は書法系の本科一年生の学生と同じ教室で授業を受ける。山水画もある。このカリキュラムのやりかたは、じっくり自分で決めた課題に取り組める点で新鮮であったし、自分に合っていると感じた。大東の書道学科の授業は一日に複数の異なる授業が一週間ずつ進行するのに対し、中国美術学院の授業は一定期間固定された科目を学ぶ。これは他の美術学院も大概同じで、ここが中国と日本の教育システムの差異でもある。

授業は午前八時半から十一時半までの三時間。途中休憩がある。午後に出された課題を仕上げたり、先生が授業で紹介した参考書籍を本屋に買いに行ったりと有効に使えて良い。多くの生徒が、午後の時間をしっかりと課題等にあてる。語学が不十分と感じれば中国人の家庭教師を付けることもできた。

北京の語学研修のおかげもあって、なんとか先生の中国語の授業についていった。ただ、日常の会話と書の専門用語が必要な授業とでは中国語の語彙範囲が大きく異なるため苦労した。特に書家の人名などは、当たり前知っているものでもとっさに中国語で言われれば何かわからない。そこに最初は苦戦した。

私は楷書の授業で北魏の像造記をやることにした。書道学科生の頃、しっかりと真面目に臨書した記憶がない。初心に戻り、一からやろうと決めた。早速、杭州市内の榮寶齋や、杭州書畫社に行き、法帖を探す。日本に比べて印刷本は安価だ。しかし、印刷が概して良くない。これでも昔よりは良くなった、と老師は言う。逆に以前は印刷が良かったというところもある。篆刻の授業の時、薦められた『上海博物館藏印選』（上海書畫出版社一九七九年初版）などはそのよい例だろう。初版は印刷が良く、その後の版は印影部分の朱が明るすぎて見にくい。当時初版が



初夏の西湖畔から保俶塔を望む



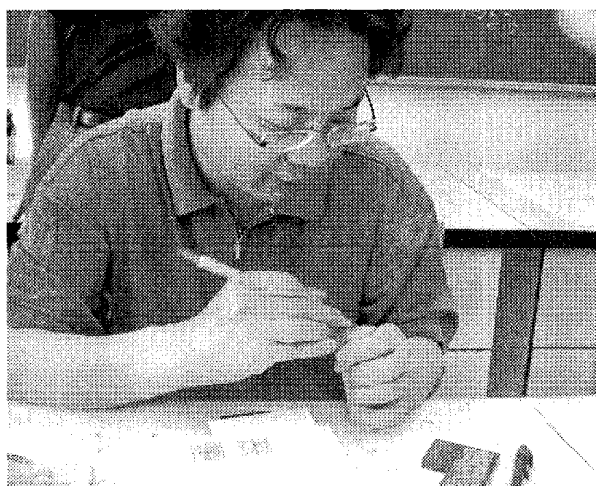
劉江先生（中央）と第6回西泠印社印学博覧会（2006年10月12日）

三・二五元だが、今最低百元以上の値がつく。しかも入手は極めて困難である。そう言われると欲しくなり、わざわざ日本の古本屋に注文し、杭州まで郵送して手に入れた。意外と日本にある場合が多い。將軍路近くの杭州書畫社で龍門二十品の印刷本を買い、その中から選んで臨書することにした。そうやって、自分で最初から選んで、本屋に買いに行き、臨書するという当り前の行為が実に新鮮だった。自分で選んで買ったものだから愛着が湧くし真剣になる。書道学科の時、法書選を全部揃えることができず、図書館で借りていた。あるいは授業で配られたプリントに依って学ぶことがあった。同じ素材でもどうも取り組む姿勢が違うようだ。意識の違いといってもよいだろう。

後ろに載せた写真には授業の様子があるが、まず筆の持ち方から教わる。手首を曲げて固定させ垂直に筆を握る姿勢は美しく感じる。祝老師のゆっくり運筆する姿は風格があつて見入ってしまう。一字一字丁寧に墨を入れ込むという感じだ。数字書くのにかなり時を感じる。祝先生は文字を大切にしていると思う。毎日筆を持って書く。実は日本にいる時、これがなかなかできなかった。

ある時ある老師から注意を受けたと勝手に思い込み、一人、錢塘江の岸辺で落ち込んだりしたことなど、今振り返れば懐かしい。後で私の聞き間違いであることがわかった。約半年で中国語の普段の生活に困らなくなった。

十月に第六回西泠印社印学博覧会が杭州市内の貿易ビルであった。会場にて劉江先生にお会いする。劉江先生は中国美術学院の前身である浙江美術学院で教鞭をとられた篆刻家。河内先生が留学した際の篆刻の先生で、私は以前から一度会ってみたいと願っていただけにうれしかった。一緒に写真を撮っていただいた。同じころ、西泠印社の学術研究会



戴家妙先生 漢印臨摸



黄華源さんと杭州で再会（2006年10月）

に参加するために杭州を訪れた黄華源先生に再会し、励ましの言葉をいただいた。留学前まで大東文化大学の同じ学生として、中国語をいつも教えていただいていただけに再会は緊張と喜びが入り混じっていた。

授業では韓天雍先生と共に蘭亭へ一日研修をした。韓先生は四十代の比較的若い先生だ。参加留学生十一名。そのほかにも魯大東先生（三十代の若い先生）の採拓実習があった。杭州呉山に行き、そこにある呉代の碑を採拓した。私はこれを機に、それからしばらく授業後に採拓道具一式を背負って一人で呉山に登り、拓を採ってまわること続けた。日本では管理が厳しく拓など簡単に採れないが、ここはそれができる場所がある。紙は温州皮紙を使用し、碑面の状態によって、二枚重ねて採ることもある。採った拓を先生に見せると墨の濃さやムラを指摘される。充実感を味わえる授業だ。自分の部屋に採った拓を並べ拓本職人になったつもりで悦に入る。

呉山のふもとまで自転車で行く。そこから道具を背負って意気揚揚と山に登る。拓を採っているとき不思議な気分になることがあった。何百年も昔からこの山に入って碑を探し、拓を採っていた人がいる。そんな時の流れを感じてぞくつとする。ふと周りを見渡すと木が茂っていて風の音しかしない。大きな岩に寝転がって空を見る。鳥の声で目が覚めた。いつの間にか寝ていた。「武林金石録」の著があるとされる丁敬身もあっているこんなことをしていたのかもしれない。

十一月に入ると杭州は急に冷え込む。午前の授業が終わると、昼食後に日本人の留学生と二、三人でバスに乗る。工業大学まで行き、そののころようやく中国語に対して耳が慣れてきたのを実感する。外の冷たい風が入ってくるロビーで私たちは勉強したが、そろそろどこか暖かい



沈楽平先生（左から二人目）  
草書臨摸各自の創作を批評する



魯大東先生（左から二人目） 楷書臨摸

場所を探さなければいけない、と毎週のように言いながらそこで粘っていた。私はそのころ、「互相」(日本人学生の間ではそう略して呼んでいた)の時間になると決まってあくびが出た。それをなんども噛み殺しながら、どうして中国人はあくびしないのか不思議だった。ほんとに彼らのあくびした姿を見られなかったからである。

十一月の初旬にダウンジャケットを購入した。日本から持ってきたジャケットだけでは乗り切れないと思ったからだ。

十二月のある日の午後、市内の花鳥市場で印材を選んでいると携帯電話が鳴り、出ると周先生から今からテレビ局の取材があるから、来てくれと言われた。突然のことでは何を言っているのかはつきり理解できなかったが、すぐに帰ってみると、すでにテレビ局が来ていた。「外国人中華才藝大会」なるテレビ番組がある。その収録があるから、杭州テレビに来て、書を実演してくれ、という依頼らしい。韓国人が書、私は篆刻になった。急遽、二寸角以上の大きな印材に布字したものを用意し、番組収録内で刻し、押印して仕上げるというやったこともない離れ業を要求されて困った。すべてが突然やってきて決まっていく、中国人のパワーを感じた出来事だった。その時の写真も載せた。後日放送されたようだが、私の部屋にテレビが無く、しかもいつ放送するのか連絡が無かったため確認できなかったが、留学の珍体験だった。

元旦は中国では日本人のそれほど盛り上がりがない。春節が後にあり、そこが言わば「お正月」だからである。だから、元旦はいたって普通だし、街の様子も大した変化はない。一つ気付いたのは、西湖畔のレストランの値段が一日から少し値上がりしたことだ。授業も三日から始まり正月気分ではない。ただ、北京にいる佐川君から日本の切り餅を送ってもらったのがうまかったのを覚えている。



王冬齡先生揮毫  
中国美術院の体育館で3日間に渡って行われた



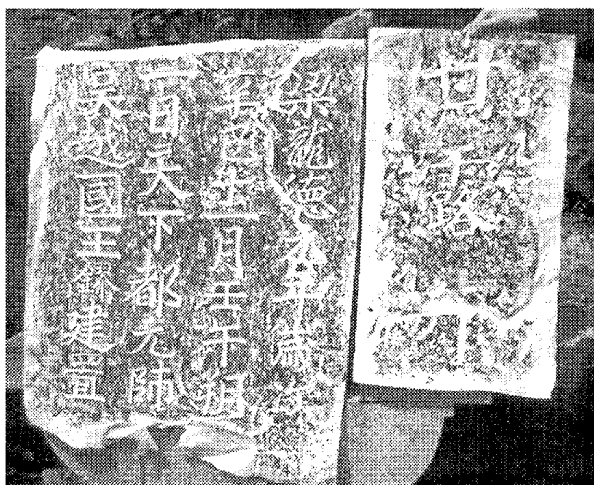
祝遂之先生(左から二人目)行書  
実技の前に書に取り組む姿勢、心構えの重要性を説かれた

二月に入ると、春節が来る。多くの日本人が一時帰国する中、私は杭州で年を越した。片道の航空券で来たので一時帰国は最初から考えていなかった。日本人留学生が簡単に帰国することに私はいささか物足りなさを感じた。それは少しでも粘って中国に学ぼうとするハングリーさに欠けると感じたからである。彼らから感じる「甘え」を私は嫌った。年を超えるその夜、寮の屋上に皆集まり始める。深夜零時をまわった瞬間、あたり一面にすさまじい炸裂音とともに打ち上げ花火が上がる。三百六十度。満天を埋め尽くす花火を茫然と私は見渡した。この時を体験した者なら分ると思うがその尋常ならざる熱気を筆で伝えるすべを知らない。とにかくその花火の音と火薬の香と火花が襲ってくる。ほんとうに火の粉が降ってくるので傘をさすものまでいる。フードに穴が空いたと隣で騒いでいる。ミャンマー人同学がカメラのシャッターを必至できっている。物事には体でわかることがある。中国人の文化をもろに叩き込まれた気がして私はしばらく花火で赤くゆらめく西湖を見ながら突っ立っていた。その広大な土地と同じく、このクニの人々はスケールが大きい。日本の厳かな正月の雰囲気と対極に位置づけてみて、その大陸文化の情熱に興奮した。これが中国なのだ、と。

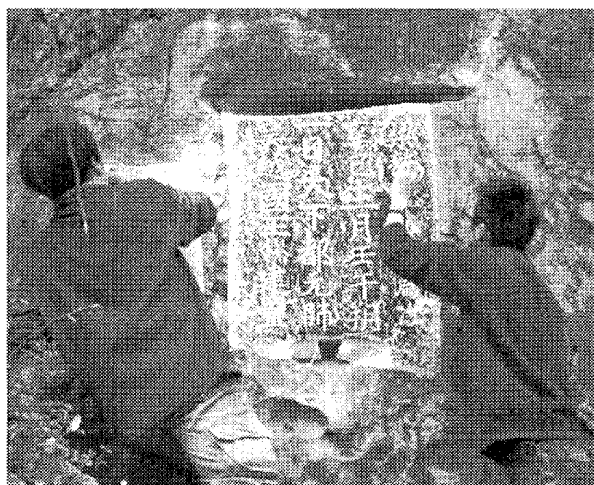
### 三、留学中の旅行

旅行は中国美術学院の休暇中にできるだけ行くことにした。中国は広大である。テーマを決めて計画を立て、自分の興味有る所にしぼった。

杭州に着いてすぐ、ルームメイトのフランシスコと「山水画の世界を体感」しに黄山へ。春節は「青田石のふるさとを訪ねて」浙江省青田県へ石探しの旅。五月の労働節には「中国にも温泉はあるのか?」という酔狂なテーマで中国三大温泉の一つ、寧海温泉へ一人で調査に行った。



完成した拓



吳山にて採拓実習 魯大東先生



寧海に行つて知つたことだが、中国美術学院の前身の浙江美術学院の教授でもあつた潘天寿の故郷であり、温泉地にはその書を刻した碑があり、画が温泉施設のロビーに掛けてあつた。潘天寿は私の好きな作家の一人である。その潘天寿が晩年静養した温泉に浸かることができ、思いがけなく嬉しかった。

留学最後に二週間かけて、西安、洛陽、曲阜をまわり、上海周りで帰つてくるといふ「書学生としての憧れの地へ」をテーマにした、眼を満足させる旅をした。それぞれの旅において、出会いと面白い経験、葛藤などがあつた。私は日頃から旅の日録をつけ、それをもとに旅行記を書くことにしている。その中から、春節に浙江省青田県を旅した「青田石のふるさとを訪ねて」の記録を載せたい。帰国後本稿用に短くまとめたものである。

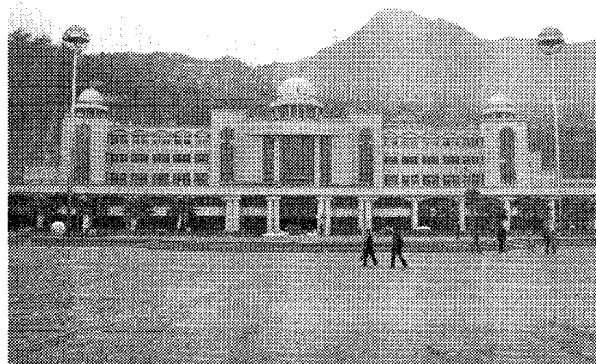
### 青田石のふるさとを訪ねて

二〇〇七年の二月末。ちょうど中国の寒假（冬休み）の時期を利用して三泊で行つた。杭州から青田までは長距離バスと列車で行く方法がある。

私は列車の旅が好きなので、列車で青田に行くことにした。ハードシートの「硬座」だと五十三元（約七九〇円。一元十五円で算出）。ちなみにバスの切符は郵便局で購入でき、一人百元（一五〇〇円）だ。いずれも片道料金。

朝七時四三分発の列車に揺られること七時間半。予定時刻よりも一時間程遅れてやっと青田駅に到着した。

写真は青田駅前の広場から駅舎を撮つたものである。閑散としていて、駅舎の姿も中国っぽくはなくて不思議な雰囲気。青田は篆刻



青田駅舎 田舎の雰囲気が漂う(2007年2月)



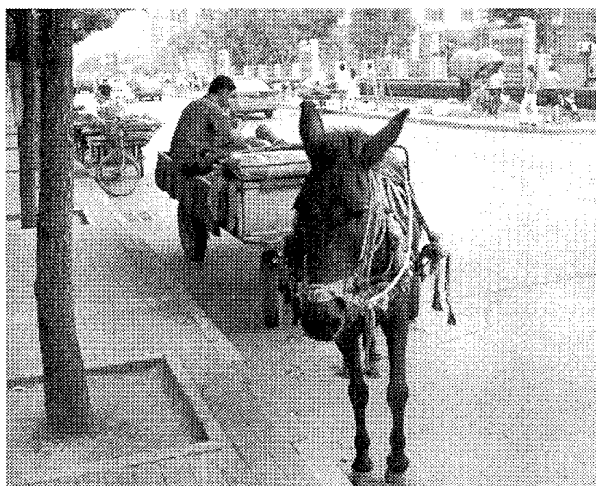
中華才芸大会に参加 杭州テレビ局

を始めた時から一度行ってみたいと思っていた、私にとってのいわば憧憬の地である。

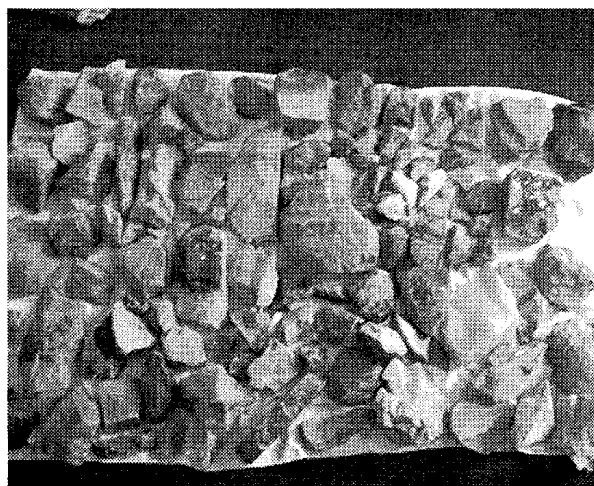
駅前ホテルは一泊百円。杭州より物価の安さを感じる。荷物を置いてさっそく駅前の青田石彫博物館に。入場料は無料。青田石を素材に大小さまざまな彫刻作品が展示してあり販売店も多く入っている。石彫はどれも優れた技術を感じさせるものばかり。

博物館を見た後は博物館近くの青田石彫市場で青田石を見る。面白いのは青田石の本場だけに原石で売っているところが多いという点。私は初めてだから原石を買って帰りたいと思い探しはじめた。たくさんの店を見て、店の人と話したりしながら疲れることを知らずに歩きまわった。ある店の主人に青田の採掘現場に行きたいと相談すると、少し遠いし今からでは遅い。自分の店の倉庫には掘り出した原石が沢山あるからそこを案内してあげる、といわれた。

主人の後について歩くこと十五分。案内された倉庫には採掘したての大きな原石とその端切れ、彫刻道具などが目に飛び込んできて思わず息をのむ。主人は青田で彫刻師として店を構えているのだそうで、ここは仕事場。普通はお客さんの見られない場所なので私はきよろきよろ道具を見たり石をなでたり。主人が私を手招きして見せてくれた青田石は草の模様が入っている初めて見る石だった。他にも水に濡らしてみると赤い石もある。これも青田石なのか、と聞くともうだと主人答える。これは高いに違いないと思い、値段を尋ねることを躊躇した。私がずっと黙ってうろろ悩んでいると、それを察してくれたのか、全部で二百元でいいから好きなだけ持って行けといわれた。彫刻で利用しない端切れなので安く分けてもらえたのだと思う。うれしいので段ボール一杯に夢中で詰めていざ持ち



街中の西瓜売り 於北京五道口(2007年7月)



手に入れた青田石の原石 色も様々だ

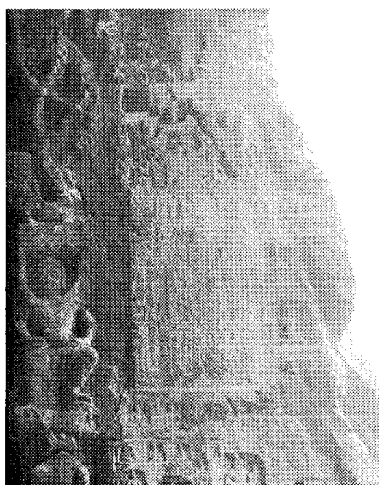
上げると底が抜けたので主人に手伝ってもらって麻袋に詰め、しかもホテルまでバイクで送ってもらった。中国でバイクに二人乗りしたのは初めてだ。私は主人の好意と出会いの縁に感激。さっそくホテルの部屋で丁寧に石を洗いバスタオルに並べた。後に載せた写真がそれだ。

翌日市内で安いポストンバックを一つ購入し、それに青田石を詰めて杭州に帰った。部屋の体重計で計ったところ三九キロあった。

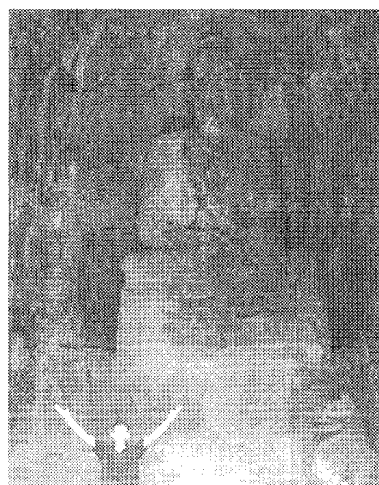
美術学院留学生班に、私が青田に行ったことが伝わり、その後数ヶ月の内に少なくとも七名もの留学生が青田を訪れている。いずれも私の話に興味を覚え行ってみたのだと後日報告してくれた。その内、韓国人と日本人のペアが青田を訪れた際、「山口」に行き石の採掘現場まで足を踏み入れた。そこは良質の青田石の原石がおちており、自由に持ち帰ることができるという。ただしその地区の管理は厳しく、一般には立ち入り禁止の場所が多いという報告だった。私は山口には今回行っていないが、面白い情報なのでここに記録しておく。山口には、今回お世話になった石屋の主人への再訪も兼ねて次回是非訪れてみたい。

#### 四、帰国

段ボールを国際船便で五箱郵送した。帰国直前の旅で金をぎりぎりまで使い込んだために、最後は手荷物をどっさり抱えて帰国することになった。なんせ印材、紙、本、衣類など、とにかく重い。空港で案の定つかまった。旅行者が二十キロのところを留学生は二十五キロまで許される。私の荷物が四十キロを軽く超えているのだから無理もない。追加料金を請求されたが、既に現金が無い。ホントにお金が無いし、私は美術



始平公造像記



龍門石窟古陽洞内部 (2007年7月)

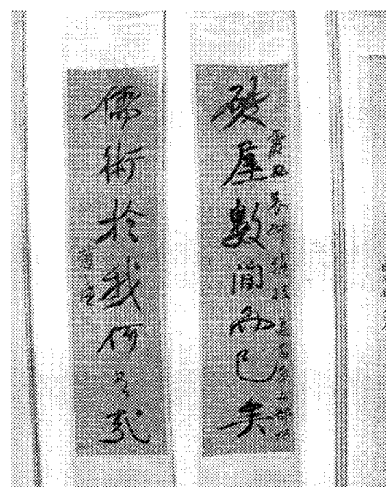
学院の学生だから道具は重いのだ。篆刻ならなおさらだ。と半分開き直って中国語で必死に力説すると、今回限りの条件で飛行機に乗ることを許された。

一年は早かった。病気をすることもなく、腹も壊さず、怪我もなく生活できた。何より、出会った多くの中国人の温かい交流に恵まれた。同じ留学生の仲間にも励まされることが多かった。何でも好きに行動する気分屋の私が日本の先生方の温かいご理解とご教示に恵まれて、充実した生活を送ることができたことを幸せに思う。好むところに従いのびのびと生きられた。

書は書く技術の前に姿勢と気構えというものがあると授業中おっしゃった祝遂之老師の言葉は、ともすると若い老師が増え技術本位の指導が増えつつあると感じていた私にとって強く考えさせられた。戴家妙老師や魯大東老師には篆刻の指導や研究資料になる貴重な資料を快く提供していただけた。

振り返れば、書道学科三年の春休み、一か月アルバイトして貯めた金を持って一人で西泠印社を見に行った。中国語はろくに話せなかったがなんとか上海から杭州までたどり着き、美しい西湖を目にした。あれから私は中国語を真剣に始め、中国に憧れた。そして夢にみた留学の機会を得た。その時の感激を思い出すと胸が熱くなる。今、既に一年が経ち帰国したが、その熱は未だ冷めない。不思議な引力を大陸から感じる。初めて杭州を訪れてからももうすぐ四年になるが志変わることなく今日まで来られたことに少しの自信を持ち、それを支えてくれた多くの人々に感謝の思いを込めてこれを記し終わりとす。

(二〇〇七年十一月二十八日稿)



西泠印社の内覧会は書画を直接目にできる貴重な機会だ (2007年7月)



杭州呉山に眠る石刻で採拓の練習

中国美术学院書法進修班授業カリキュラム（2006年9月～2007年7月）

前期（9月～1月）

月	9月				10月				10/30~	11月			11/27~	12月				1月			
日	4~8	11~15	18~22	25~29	7~8	9~13	16~20	23~27	11/03	6~10	13~17	20~24	12/1	4~8	11~15	18~22	25~29	1~5	8~12	15~19	22~26
書法進修班	オリエンテーション		楷書臨模		行書臨模		隸書臨模		古璽臨模		古文字		山水基礎		書法理論		行書		大篆		
	魯大東		沈浩		戴家妙		魯大東		張如元		戴光莹		魯大東		祝遂之		呂金柱				

後期（3月～7月）

月	3月				4月				5月			5/28	6月				7月
日	5~9	12~16	19~23	26~30	2~6	9~13	16~20	23~29	7~11	14~18	21~25	~	4~8	11~15	18~22	25~29	2~6
書法進修班	オリエンテーション		楷書臨模(含魏碑)		篆書臨模		草書臨模		行書臨模			漢印臨模		隸書臨模		山水	
	魯大東		沈浩		沈楽平		呂金柱			戴家妙		周峰		戴光莹			

一日の時間割

